

氏名	庄 怡		
学位の種類	博士（デザイン学）		
学位記番号	博甲第	8740	号
学位授与年月	平成	30年	3月 23日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
審査研究科	人間総合科学研究科		
学位論文題目	Acceptability of Design and Color of Outdoor Advertising in Historical Urban Areas in China and Japan (日中の歴史的な街並におけるデザインと配色を考慮した屋外広告物の許容)		
主査	筑波大学教授	Ph.D.(Psychology)	小山 慎一
副査	筑波大学教授	博士（デザイン学）	五十嵐 浩也
副査	筑波大学准教授	博士（工学）	山本 早里
副査	実践女子大学教授	博士（工学）	槇 究

論文の内容の要旨

庄怡氏の博士学位論文は、日中の歴史的な街並における屋外広告物の配色に対する許容度について検討したものである。その要旨は以下のとおりである。

現在、京都等の歴史的な地域では、屋外広告物の色が規制によって厳しく制限されている。屋外広告物の色は、歴史的な雰囲気に合わせて、特徴あるブランド色から茶色などの地味な配色に修正する事例が多い。また、屋外広告物は面積も制限されており、多様で特徴のあるデザインを行いにくい状況にある。制限下での画一的なデザインは広告物としての特徴の欠如やわかりにくさにもつながり、訪問客の不利益になっている可能性もある。

このような現状の中で、本研究では色彩計画を行っている歴史的な街並及び歴史保存地区に隣接する街路を対象とし、街並の雰囲気と調和しつつも多様で特徴のある屋外広告物のデザインを行うことを目指し、色彩計画の観点から詳細な検討を行っている。具体的には屋外広告物の色相、明度、彩度及び使用面積との関係について検討するとともに、誘目性と調和をもとにした屋外広告物のデザインと配色と許容の関係を検討し、最後に色の許容をもとにした屋外広告物の色彩計画を提案している。

第1章と第2章ではフランス、イタリア、日本と中国の街並における色に対する制限方法と、日本と中国における屋外広告物の制限方法に関する調査について述べている。調査の結果、歴史的な街並では新しい色や鮮やかな色を取り入れることが難しく、色に対する制限も他の地区より厳しいことや、屋外広告物の色は色の使用範囲、使用面積などが制限されていることが明らかになったことが述べられている。

第3章では、日本と中国の歴史的な街並における屋外広告物の背景色の色相や明度、彩度によって許容できる使用面積を明らかにするための印象評価実験を行っている。実験では三つの評価項目「伝統」、「調和」と「許容」は高い正の相関があった。屋外広告物の色に対して、有彩色の場合、

建物の壁面の面積に対して3%以内、明度3、彩度6以下、色相R、Y、Bの色に対する許容は類似していたことと、色相GとPにおける許容できる色の彩度はこれに比べて低かったことが述べられている。また、回答には被験者の属性による有意差がなく、全体的な回答の傾向が一致していたことが示されている。

第4章では三つの評価項目「誘目性」、「調和」と「許容」を用いて、広告物のデザインや、背景色と文字色の配色と広告物の許容に関する印象評価実験を行っている。実験の結果、広告物の形について、自然な木材の形や変化がある形、つまり、伝統的なデザイン要素を用いた広告物の「許容」が高いことが明らかにされている。また、色については、背景に低明度低彩度のR系または中明度の灰色を使った広告物の「許容」が一番高く、広告の背景色がR～Y系の色相の場合、低明度低彩度の背景色の「許容」がより高いことが明らかにされている。

第5章では、3章と4章の実験結果を比較分析した上で、許容が高い配色とデザインの特徴をもとに、歴史的街並に対する屋外広告物の色彩計画を提案している。実験では低明度低彩度の色相Rの背景色、白の文字を使った屋外広告物の許容が一番高かったことから、著者はこの配色を使う時、屋外広告物の面積を大きくすることができると提案している。また、著者は屋外広告物のデザインを変更したい時には、自然な形や、歴史的なデザイン要素を利用することを提案している。

以上、本研究では、詳細な調査と実験を行うことによって、制限が厳しい歴史的な街並においても一定の配慮のもとで広告物に鮮やかな配色やブランド色などの多様で特徴的な配色を用いることができる可能性が示されている。さらに、許容範囲を超えた配色であっても、面積を調整することによって、許容範囲内の屋外広告物として設置が可能になることも明らかにしている。

審査の結果の要旨

(批評)

現状の歴史的地域における屋外広告物のデザインは、許容できる配色を詳しく調べることをしないまま茶色等の無難な配色を用いる傾向が強い。本研究で著者は独自の視点から詳細な現地調査を行うことによって、他の研究に先駆けてこのような現状の問題点を指摘することに成功している。また、性別・年齢・国籍等の異なるさまざまな被験者を対象に詳細な実験を行うことによって、許容される配色に関する信頼性の高いデータを得ており、エビデンスに基づいた新たな配色案を提案している。以上の研究成果は独創性が高く、今後の歴史的地域における広告デザインにも有益な、価値ある研究である。

平成30年1月25日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（デザイン学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。